

■ 今月のメッセージ(2010年2月)

日本銀行富山事務所長

水上 誠一

当地での2回目の冬を迎えました。今年の天気は昨年と打って変わって、赴任前に北陸出身者に聞いた「北陸の天候」そのものです。しかし、この北陸らしい空の下でこそ、冬の豊かな食文化や味覚が発達し、今その恩恵を受けているのだなあと、勝手に納得しております。

本来当地の冬は、こうした美味しい食材や豊富な温泉を求めて消費が活発となる時期のはずですが、厳しい経済情勢の下で、デフレの苦しみを味わっています。デフレが続く限り雇用は増えず、雇用から所得が生まれなければ消費が減りデフレに拍車を掛ける、という連鎖を何とかして断ち切らねばなりません。

スーパーでの破格の商品は、誰にとっても嬉しいものですが、不当なまでに安いことが経済にとって決してよくないことは、徐々に国民の間にも理解が広がっているのではないのでしょうか。デフレで食費が減って「助かった」ではなく「得をした」と感じている方(=それだけ余裕がある方)は、その分でちょっとお高いですが富山県産の野菜や食品をもっと買って見て下さい。例えば、私が愛食している、立山のサラダほうれん草や滑川の柔らか白ネギは生食で大変おいしく頂けますよ。単身赴任者としては二重生活で節約したいところですが、他県産と並んでいたら必ず富山県産を買っています。

地産地消というと農産品が中心ですが、買物用の1人乗りの電気自動車といった「製造業の地産地消」に力を入れている地方もあります。製造業の強い当地でも、環境・高齢化といった日本の課題に即した使いやすい製品を県内で開発・販売して育てられれば、きめ細かい改良ができ、それが全国や世界に通用する商品になり得るという期待もあります。因みに、全国版の「モーニングサテライト」という番組で、「地方の底力」の第一回のテーマが「富山の薬が急成長」でした。この分野でも新しい発想が出てくるかもしれません。

勿論、デフレの根源は旺盛な海外需要を前提とした供給能力の大きさから来ていますので、簡単に「内需振興」で済む問題ではありませんが、「地域は絶対に守る」「若者が誇りに思えるふるさとを築く」という強い気持ちを持って地域崩壊を阻止することが大事だと思うのです。頑張りましょう！